

後序

此みちの不通に此道を釋は。繪にかける女郎の胸づくしとつて。うらみいふにひとしく。此みちの不通此書を見るとも。紅毛人の口舌を聞が如くあるべし。通と不通の本阿彌は。此兩子にあらざして誰ぞや。野暮の見るもんじやアぬへ。とをひゝせく

此むち來賀無禮亭において跋す

雜艶
話語
志
羅
川
夜
船

5
12

5
12

自叙

千兩の黄金も。三十二文の孔方も。悉皆一物にして。上は三浦の高尾。頼兼が城を傾け。下はぼちや／＼のお千代。折介が鼻を傾く。都戀に上下の隔なし。況賣色に於をや。中三の生る島もなく。川岸妓の釣る池もなく。その流れの源は一ツなり。されば金欄の夜着も。煎餅の蒲團も。寢て見る夢に差別なし。今や一個の通子あつて。青樓の西岸に遊び。閨中の少婦が。愁を知らざるを。予其趣を一帖に述。初に武左と素見の二篇をくはへ。夷狄だも殊あることを知らしめて。四方の遊子に。南庭一片をはづませんと欲云々

山 東 京 傳 述



京 傳 述

羅 川 夜 船 志

5
15

目 録

- 武 左 の 初 會
- 素 見 の 高 慢
- 西 岸 の 世 界



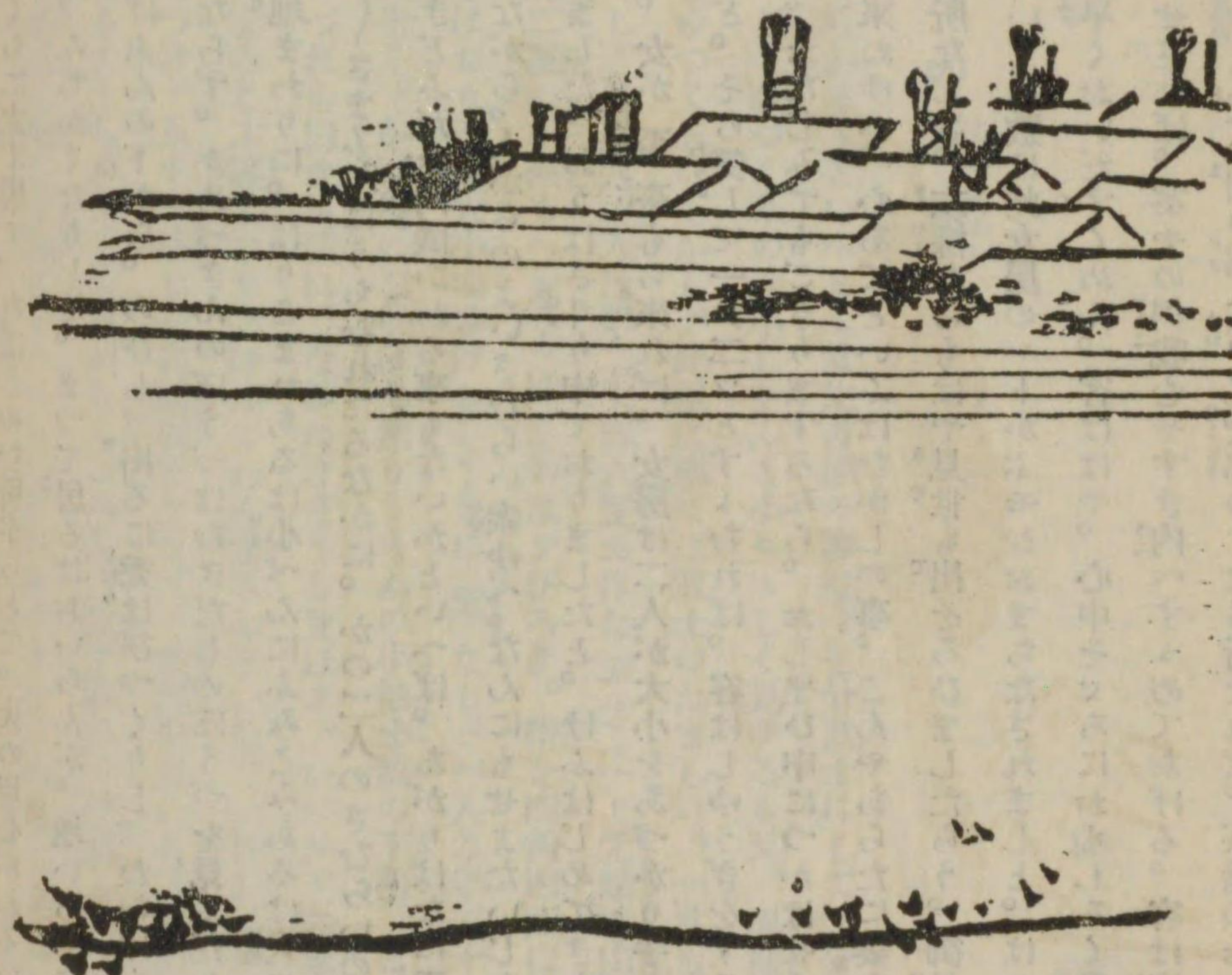
京傳画

○武左の初會

人は武士なげ傾城に。きらわるゝといへども當生吉原の客は。七分武士にして三分町人なり。されど色里のならひなれば。ぶつきき羽織に。どう金づくりの大小しやんと小りゝしく見ゆるも又。異様なり大小と遠くねる夜も一ト盛りとは。お武家がたのじゆつくわいぞかし。此里に来ては武士のたましい。一寸もひかぬ氣になるは。戀はくせもの傾國のしるしなるべし。此客人一人は年二十五六髪おほたぶさにて元結澤山に巻てゆひ。淺黄の五分長じゆばんかいき縞の下着。黒羽二重の小袖もへぎこはくのはどびろき。帯を四角四面にむすび。黒縮緬の綿入羽織白糸にてべつたりと。ぬひ紋しはおりの紐大小のさげをともし紫なり。一人は年五十斗りさかやき赤く。かほに白なまずできてはけまげふしほそく。かば色のじゆばん黒りうもんの小袖小紋の下着。とひさやの帯おなじ裕羽おり。玉むしの色の茶丸のうら。いづれも白き足袋に。なかぬきぞうりをはき。いつかどの家中しゆと見へ。いかにも茶やあるいはやり手まわしかたのよろこぶ客人なり。けふくわん音さんけいを。いひたてそれからそれたまりならで。はづみきつたる心をむりにおちつけ。ゑもん流しの衣紋坂をりて。大門をはいれば茶屋の軒ごとに。七くわん音の夜とてりんぼうと。まん字付たるてうちんをつらねからんころんの駒下駄に。け出しまづまの八文字。お梅さんゆふべはおやかましうをつしたと。妙なる聲に女房がモシへちつとおあがりなされまし。そふならぬものさと。いひながらた

ばこ付ていたせば。かどくちに立て居て。たばこのむ所がらとて。火の用心かわるいと。とがむるものもなし。こなたには新造禿が長くなり。みぢかくなりして。まつて居るはおいらんが。地いろしにてれん茶屋へ。しけこみしあとなるべし。犬が茶やのあげゑんの下から。のびして出るに禿はびつくりし。ねむけもこれですこしはさめたるなり。中の丁のさまはいちやうならず。きめつきんのぼうづはむきだしのぼうづを見くだし。しやうわるな客はほうかふりに。さまをかへすけんは地まわりに。はりこまれあるは小べんにふみこみあるは犬の糞にすべり入り來人も出る人も氣は天上にのぼりいろくさまぐにうちむれたるなかに。かの二人のさむらいの客は。同役のしつた人の茶やを目あてにのれんを。のぞきどふだお内儀かわる事もないかといへば。あがりはなに禿の口上をきゝ居たる。女房立てろくに見おほへもせぬ顔ながら。人がらのよいさむらい衆ゆへ。なんにもせよたいじない客と見てとり。是はくお久しふりてよふお出なざりました。おうはさ斗り申ておりましたと。けふはじめてきた客にあわせぞくなつた口上もおかしくすはるやいなはや。女が盃臺もち來れば。女房は二人が大小をあづかり手あぶりがたよせて。さかづきをはじめ何やら咄はわからねど。そら笑して一ツ二ツとすゝむれば。客はしゆうぎをするにはや女房おち付顔。どこぞお心あてどもござりませるか。おなじみでもござりまするなら。おしまひ申につかはせませしやう。イヤく此ごろのきびしいで。うちたへ此地へ來ぬゆへ。心あてといふはむかしの事。こんやあらたに妻をさだめるつもりさ。ほんでござりまするかへ毛頭いつはる所なしさ。左様ならもはや見世も出そろひましたらう。御見物なされませ牛介かてうちんとぼして御供しやれと。内證は早くおいだすくめん。客ははや。心中そとろにおもしろく鼻唄で。あちこちと見てあるけどごきげんよう。内證は早くおいだすくめん。客ははや。心中そとろにおもしろく鼻唄で。あちこちと見てあるけどよくこゝろ出てさらに決せされば。茶やの男我心やすき内へすゝめてあげる。客は廣ざしきにやうく茶やの男ととも三人なれば。居所にまよひ床の間の脇へ居る。女郎のすはる所なれば。茶屋のおとこきのどくがり。心のうちで笑

5
13



ひながらもちつとこちらへお出なされませと。いとところをかへさへすれば。ほどなく廻し方女郎の。たばこぼんもち
 來つてならべ。おさだまりの盃さかずきてうしいだす。女郎のでるまで。客は大おんじやうにひる。おごりたる事尾しづなに尾を
 付て見えをいひ。同役どうやくの友だちと三四ねんあとに。ちよつと來た女郎やの出をくはしく知つたかほにはなす。この座
 敷しきのやうすにて廻しかたも。やぼなきやく人と見てとる。女郎もらうかを通りながら此やうすをちらりと見るゆへに。
 座敷へ出やうもことの外おそく。まわし方にせつかれてふしやうく。首くびきりばへださられるやうににべもしやく
 りもなき顔つき苦界くがいの身なればこそ。かはれますといはぬ計りの顔色かおいろにて。出ながら何やらほかの女郎とはなし小聲
 にて笑ひながら來て坐鋪ざふへはいると。横よこの方むいてすはる。客は今まで高聲たかこゑで。はなししたるもきやうにそげて。こ
 との外ほか小聲こゑになり盃事さかずきごと。たばこのむにも心用こころもちひて。何か氣ぐらうになる。女郎は茶やの男にむかひ。ダイブまじめ
 だのどうさつしつたと。初音はつねいつればその尾にとりつき。茶やの男すこし。おかしみをいふて。女郎をわらはせ禿かぶろを
 なぶりていやがらせ。客の方へもいろくはなししかけて見ても。とかくすこたんなあいさつ故。座ざしきいよくか
 たくめいつてきて。客と女郎との中に一言一句のはなしもなし。客はあまりてれて手持てなければ。れんじの障子しやうしをあ
 け。つれの男と天氣てんきのうわさや。あしたの奉公ほうこうの番ぐりをはなし。小聲なり。茶やの男あまりきのどくさに。ちよつ
 と内うちへ知らせ参りまゐりまじやうと。てうちんとぼし廻まわしかたに頼たのんで出行しゅつぎば。客はたのみに思ひし。茶屋の男かへれ
 ば。木きから落おちた猿さるのごとく。しばらくならめくらして居て見たか。どふもつまらずこはくながら。女郎にはなしか
 けてみれど。女郎どし顔を見あはせせばかりで。返答へんたふなし扱あいははいや。此女郎二人ふたりともに瘡かさかと思へばよつぽど
 すぎてふしやうく。あいと口のうちに返事へんじしたばかりに。とくものもいはれず。酒さけばかりのんで居る是をとなり
 座敷ざしきから見れば燭臺しよくだいのあかりしやうじに。うつる罔兩かうらうばかり折々せせうごくやうに見へて。あふぎのおとハチく。灰吹はいふき
 をたぐ音トンく。鼻をかむ音チンく

○素見高慢

すけん山すけんさん きふう「さふしたきぐくとしら菊のおなじ流れの身じやとてもコレむすこもなんぞうたはツセエだまりんであ
 りくと犬かほへるぜ。おすこいかさまわつちも。幾いくさんの所へでも。通つてちつと唄うたでもならひやしやう。きふう「ナ
 ニ公こうなどは。本ほんぎやうが通つうだから唄うたを習なふよりちりからにすればい。月見などはよし原へ行いとがうてきに色いろごとが
 できるぜ。むちりからも五秋ごしゅうさんはなくなるしはじめは向むかひ町へ出る。今いまじゃア天神てんじんの助入すけいりより外ほかは。山の手やまてにはご
 ぜへせん。きはやへもんだ。そうこふするうちモウ坂さか力本トへ出る。辻つじ駕かハイ且また那な貳に百ひゃくで二にてふめへりやすか。き二
 てふでよし原まで二百にひゃくか。駕かそんなむだをおつしやらすと。いさくさなしにしめやし。き二百にひゃくならおれもかついでゆ
 かふ。二にてふて百ひゃくなら乗のふ。駕かそんな事ことなら埒あちは明あねへト跡あとへ。きだれがあんな高たかへ駕かへ乗のもんだ。二百にひゃく出ですと明あぼの
 へ行いつて餘あまツ程ほど。うまひ世界せかいがかける。むほんにあの茶漬ちやくじのやぢをか心こころまちをして居るだらう。よりなほるか。きナ
 ニあすこにも下くだりが有るからふさがりわらべだよ。むおめへ毎まい晩ばん出でなざるかいつてもすけんかへ。きコレサしづかに
 いはつせへ通りの人が聞きて外聞げいぶんがわるひ有り昔むかしはおれもはつた者ものよ。大町おほまち六十幾いく軒けんに五十軒ごじゅうけんの河岸かたし見世みよ。てつぼうにい
 たる迄いた一軒いっけんも上あらね内うちはなくて。大門だいもんを打うたぬばかり。起おこ風ふうさんといつちやア飛と鳥とりも落おちるやうだつげが。すこし色事いろごと
 の筋すぢから。もめ大根だいこんができて酢すのこんにやくのと。うたせるから。ぐつといたちの道みちにしたよ。それだによつて今夜
 などあそばふとおもへば。昔むかしそふいふ世界せかいを書かいて置おいた。名なにしをふおれが事ことだ。物を格かく子しくどきの相生屋せいせいを一いばん
 御目ごめにかければ。どの傾かたでもどつこい承知しょうち之の介すけだけども。それもむだな事ことだよ。功成こうせい名なとけて身みしりぞくとやらで。
 いつそすけんと云所いふところがありがてへよ。むすこなどもそふさつせへ。むすけんも歸かへりが難澁なんじふじやアござへせんか。きそ
 んならどこぞ茶屋ちやにひける所ところもあるか。あらばおれも附合つきあつてやるふ。むサア有ありや有ありけれどもいひにくしいつて

5/15

しよせん引ケやせん きおきやアがれ相談が出来るかと思へば。そんならやつぱり見物素見禪てんまか せ此みのわの内が長ひからてへくつするねへ きこの先の横町といつて松葉やと丁子屋の別そうが。むかふ合て居るをれが大名だと。爰をぐつと縫上ケをさせるよ せアノ何はおめへ きコレ明ほのゝ前たかくれて通らつせへと行す 今見付た様子じゃアねへか せナニ誰も見へなんだ きヨシノゝ時に公に素見の通をおしえて置ふ。まづ第一五丁まちをそゝるにさとるやつは。まわりやうが悪ひから同じ町を二度も三度も通らねへければ。それならねへは所をやるうが案じやしたソレからひんそろにぐつと伏見丁の。下直な所を見るはヨシカ。それから二丁目を下モから上ミへ見てすぐ江戸町へはいりやすソレよし。それからけつまづかねへやうに西川岸をつゝ切つて京町そゝりの新町へ来て。それから羅しやうもん川岸を通つて。角町を打留メにして中の町へ出て。犬のくそのないはし通りを通つて歸る何んと。おそろかんしんだらふむすこあやまつたか せきついてもんでごせへす きかふいつちやア鹽ざるをどこへ置いて来たといふやうだが。かうまんでも髭なでゝもねへがすけんではマア日本一の通だヨマアいつたら見さつせへソレ傾が見世に居る癖をいつて聞かしてやう。まづ小ざらしが三絃を弾く。御射山かくさぞうしを見る。玉かづらがはりひぢ。松人が立てひぎ。深山が琴をしらべる。瀬山が文をかく。七越がきせるを通す。扇野か耳こすり。かたち野が火いぢり。其外まじり小見世まで。だれはしやくをおさえる新造の。だれはいねむつて居る。こんなこつちやアねへ。つがもなぐそれゝに穴があるけれども一ツ朝一ツ夕にははなされねへ。ならうとおもはばおらが内へちよくゝきつさつせへ せいつてもおめへ留主だからむだど せなはし行うち大をんじまへを 歌みだれ鳥口舌した夜のきぬゝは きあすこはどこと思ふ せ西川岸さ きおれが二夕晩三ばん通て来た。かうてきに通になつたの せこゝからゆかれるとよつ程近ひね せ爰はめへど牽牛七といふやつが。切られた所だそれから番小屋ができた せ何んだかおかしな匂ひがするねへ きム、又小つか原でやくそふだ。鼻へせんをかはつせへ此匂ひがすると。爰は降りたがるよ せそこいら

○西 岸 世 界

は歸る身ては案じはねへヨ きソレその刀々二本があやまる大門へは一本ではいらつせへ せホンニ今忠五郎が所か。つんぼうが處へでも。あづけりやアよかつた きそれも我方寸の内にありさ。此笹の中へかくして置がいゝ せひよつと人が きナニサしるもんだそこが。まだやぼだおらも無刀に成つてはいるよ。人はこねへか氣をつけさつせへ せヨシノゝ サアこれで腰がかかる成つたコウ標八玉のしん造にとんだ。いきなたてひきの有りさうなやつがある。こんやもいれぱいゝが。いつもゝ建具やのかるこを見るやうに。格子ばかりしよつてるよ せおつな所に本屋が有るの きこれはげいしやの駒次が内だ。この格子が松葉やの別家だ火事の時分はみんな女郎がこゝにいた せ「まちねへこゝでちよつと き小便なら奥田のわきがいゝ。そして公と羽おりを取かへてきよおれがのはあんまりだてだから。夕べの人がまた来たと直に格子さきで目につく せ「こんやは賑だね きマアいそがつと衣紋でもつくりの。いかにも傾城買といふつらて大やうに大門をはいるがいゝト二人は大もんのうちへはいりけるが。出入のし

いづくが鬼の宿とさだめん。よし原の假宅もおのか住家にかへれば。徳土にはへし。へんゝ草もすがゝきの音にのみ残り。材木の間に鳴しこころぎもむかふの人とよぶこ鳥おぼつかなくも。只ひとり藏のさしかけに夜ばんせし若者も。はやきんゝぜんたるかほつきの壁土の山にひきさき紙の目印つけしも跡方なく。大工のはまりしどぶもふたがで。ひの木がかほる新宅のはんじやう。五町のにぎはひむかしに百倍せり。げにやけぼりとは此ことなるべし大町の家々はいふにおよばず。西川岸の夜見世も中洲兩國のうそさむきに引かへて女郎のかほつきにもはや。よし原のおもむきあらはるゝぞかしさいもん「西行いかにとありければ。どれゝんゝと見世をつかうらさんどふした。へんな顔をして居るぜ。中洲よりさむくなくつていゝの。しかし四ツ竹ぶしがきかれねへてわるからう 女郎「だれが徳さんか。

58
15

どふりできいたやうな聲こゑをした。てへぶ遠くからきなんすね。そり「あなたは里に馬はあれどサ。女郎君をおもへばかへちくしやうめおばさんによくいつてくれなんし。そり」をつとのみこみ山ざくらかなトゆきす。女郎「ありやアどこのかむすこだつけね。女郎「ソレサ中洲のきりやのむすこさ。女郎「そふく、あのとをい所からよくきんすねい、こんだね。女郎「いろでもあるでおつしやう。女郎「物づきだねへトいふ折からおもてには三人づれひとり江戸ものにて名は源一人は田まぢものにて名は久兵衛ひとりは茶やのむすこ。政「こゝをちとみやうハ、アおもしろ狸だはへ。源「こつちらの火いぢりをして居る。女郎はひてへをかなづちで二ツほどくらはせると大橋のお今といふはたけたせ。政「をぎやのあふぎ尾さんをすきがへしへすつたといふくびだ。久「ありやアゑもとやの半がめへとなじみさ。源「こゝへあがりほどふだ。政「おらアあやまらう。久「なぜく。政「今夜はうらだから南一いてへそふいふとはしねへ。久「そんなら此ぢうのばんがあつたな。おらをはすしはうらみだせ。源「それじやア相談ができねへサアそんなら早くどこへでもきめて。あがらう。すこはらがきたの、天神だ。久「さむしいやつさほんに早あがるがい、のさ。又ひけをうつとまごつきてうちんだ。政「いつそめうつりがしてきたのうトけつちやくせぬ所へ京町の書やくきかゝる。書やく「政公とふだヲ久兵衛さんもちざか戀には身をやつすの。政「モシきん猫のおなじみはどふだねこつちへきたらう。ゆしまのがけからもい、のがきたそふだ。書「そふさ役年のらくじやうがあるのに賣女はいぢよがきたからいそがしくつてならねへ。久「モシこのごろのまきはだがこんだね。書「あげや町の山豆まめさ。久「だがかちやした。書「ばたはわつちがとつたがおくがい、句さまわれてくびといふだいてくる宿やどできせるをほめられといふ句さ。久「よくしたねへ。政「なる程こいつアまわたくびだらうトいふ所へむかふから丁子。政「かく。久「なぜかくれる。政「かけがよらねへてこまりきるわな丁子やなどはりやうけんづよいからなをきのどくだ。此此さわぎて書やくとわかれ。源「サアこゝへあがらうくさむくつてならねへ。久「あがるがい、く。トうちへはいり政ははきもの。若者「おはきものはこつちへ。政「ホイ客人をおくつて大見世へいつたくせがうせねへいまくしい。久「しやうをあらはすの。若者「おみたてなされまして三人はしごのどんから見た。久「おもしろく

ト二かいへあがる川岸みせはらうから。若「マアちよつとこゝにお出なすつてくださりましたト三疊歌のまわし座敷へ。政「ごうぎにやけ穴のある疊たもとだどうらくもの、布子を見るやうだ。源「おきこたつてねわすれたのさヲ、まだ大井ができねへをうばく宗の本堂のやうだからかみの中よりは丹と奈羅ろくしやう。政「此からかみはよりかね公御入といふ道具だわかいものは女郎あんどろを。若「サアこちらへト三人を入れて下へゆく源。政「これは書おきをよまうといふあんどんだねとゞふつけすとひやうしまくだ。源「何か書であるぜ。久「ナンダ「二朱出して海瀬うみせをかひに北の里。源「イ、く、とんだねられたとみへる久兵衛。源「あるはし。久「ウ、上の紋は丸に五本ぼねの日の丸扇下が五三の桐こいつはひねつたもんだ三味せんぼりのおやしきかのよもやそふじやアあるめへ角丁の花山名順さんのもんだトふたをればはしがみ一ツかつほぶしのほそく。此はしがみのうはがきは惣兵衛ハ、アきこへやしたこりやア鳶澤丁川岸のふるぎやのばんとうだもしれねへ。政「こいつア露しやうと書てあるわかりやしたこりやア大をん寺めへのあけぼのからくる客だらう。源「あけぼのきやくは百六ツ。久「アわりいわりいろしやうおしやアそんなねがでるトむだくちん、に用だんすの下の。政「これよさつせへそのひきだしにやアかたずみがあるぜトいふゆへ下のうすいひきだしをあげてみればとりのまぢのびいどろのくま手一本田まぢのちた。久「マア都鳥のいくわんがあるトひら。大山の。政「もつてへねへよさつせへわりひしやれだうへにあるどなべをあげてみればつべたくなつたあ。政「まんざらでもねへかすの子を一ツ。こいつアつめてへ。政「もうよさつせへわかいもの。若「こんばんはだいぶおさむうござります。久「どふだへにぎやかかへ。若「あまりにぎやかでもござりませんが中洲は宿ちんが高イからどふでもこつちがわりがようござります。源「こんたアみたやうだ角トのつたやにいやアしねへか。若「へい、へ大三屋におりましたをくのほうよりぼうづ。りほうきとりはぞ。若「此がきやアぞんざいなお客人のござるに。久「ぞうりだしてはうきなめにあわせるのうしよはな歌て来。かい。政「これてめへのひへはなをつたか。久「なんだこんのたびだなひねつたもんだソレてめへのせなかに大きなかぎざきがある。こじよく「コリヤアねみせびらきの時せいろうのすみへひつかけてやぶりいしたよもつとも此こじよくは折ふし小づかひせにぬすんでだぐわし

58
19

をかひひしてね小べん 久「おらア又かけ清が切りやぶつて出た穴かと思つた 源「コレなにをいわつしやる こじよく、ばか
をたれるくせあるべし 久「おらア又かけ清が切りやぶつて出た穴かと思つた 源「コレなにをいわつしやる こじよく、ばか
らしい 下へゆきだいてうしその外出の物もち来り 若「お一ツをあがりなされまし 源「これおちいどんこんたにたのみがあるぞ彌
八玉やのむかふうらのかみゆひの庄介が所のぞうにかつて来てくだせへそしての水戸尻の相生や 源「お出なせへ
てきてくだせへそれたのみます 下南一なげ出す兩方で南一ではわかいもの 若「かしこまりました 上立 源「サアみなさんお出なせへ
三人のあいかた女郎出る先へいづるは花代とて廿二三とみへてかほたくましく人のわるさうな女郎これはおたびからとられてき 久「ヤア丁子や
てやくねんをこへかわれるもちろんきやくとりなり紫のよほどきたきんしのすれたぬひもやうのうちかけもんどころはまいする 久「ヤア丁子や
のおいらんこちらへ 下あくてんをいふつぎに出るは月の戸と云まわり女郎としは十九ばかりはほろは木さわかきのごとくあからみ兩ほうの小びんへ
たちりめんの小袖もん 政「ハ、ア梅ばちの御紋は當世だわつちがふんどしと同木同作だ 源「そのあとは雪のふりそでしんぞう大みせ
所はきんして梅ばち 政「ハ、ア梅ばちの御紋は當世だわつちがふんどしと同木同作だ 源「そのあとは雪のふりそでしんぞう大みせ
ゆひでひつめ 源「おめへはまげへまぢ人をかけたの可愛らしい子だ茲へきな 政「此子はひなづるさんの所のつるしに
よくにているねへ 源「サアでへぶせまくなつてきたおめへがたはあんまりそつちへよると舟がかしぐによ 三人 女郎「ほ
ほ、く、 下わらふ源は一ばんめの女郎久兵衛は二ばんめ政はふりそでと 源「げびぞうはまんざらでもねへす 久「なる程よく食たが
る人だ 政「げこをあらはすね 下ふりゆきの「わつちがもつてあげんしやう 下めしを 源「これははばかりの山櫻 雪「ぬしは
へ 政「おらア飯はあやまらう酒をのんだらちとのぼせてきた 下おもてのれ 源「おめへはあけホ、ウあしたも天氣はよしのくず 源「こつち
はかんざらしになるしめさつせへさむいぜく、 月の戸「ゆふべも此あてが狐火がもゑんした 久「れいこくがにほつて
わりいしめるがい、 又来る、 こじよく、モシへちつとおくんなんし 下酒を茶づけちやわんについでゆく 久「サアおもしろへく
モシおめへがたちつとおあがり 花代「おかたじけなふおすがたべんすめへ 源「此そばを一ぜんこれはそつちてくはつ
せへ 下ぶつかけの二ツのつた 若「これはありがたふござります 下此うちいろくもや 若「ちとかたづけましやう 久「そいらも
よからう 下女郎はみな下へ行く 久「モシおめへの女郎のくびははなせそうだね 源「わるい色の女郎だなんでもや
まひがあるよ早くためでもねがへばい、 久「うさアねへつとめをさげ三人の床おさまりはやひけらうついきまきは 女郎「おめへ、

もくきてくんなんしだねおそいからきなんせんかと思つたヨ 客「こんやはあいにくにきやく人のもめがあつてせんで
こられねへ所だが今松ばやをおさめるとじきにきた 女郎「おめへもつてきたのはてうちんか 客「扇やに七ツのむかい
があるからすぐこつからむかひにいつてうちねたかほをするつもりでかんばんでうちんをもつてきたをこらへお
いてくりやア 下なげ出し 源「花代がへや床の内 久「ねどうぐがだいぶりつばだねへや持だけありやすしかし三ツぶとんと
はちとつよすぎるねドレうへのふとんが緋縮緬中がもへぎ下があさぎべちやアねへおめへここの餅といふものだ
源「まくらをみねへ金もんがまだあかくなねへひきこしにかつたと見へる 下あけて何かこんたんの文があるこいつア
おもしろへトひらきおきやアがれきやく帳だ 久「そのあいだにまだ何かある 源「こいつはたしかにいろ文だ 下あけてみ
りやうの 下ア、引、んをきて来ル 政「おれひとり大よいだ 下よぎふとん 若「こいつは大わらいだコレ久公此ふとんをしつて
るか 久「よく、そふいやアどふかみたやうだ 政「ソレ尾田木をつま川さんがぶんさんにだしたやぐだしがもおらが所
の客人がしてやつたのだ 久「ウ、そふだ、 源「ほんにかこれい、此やぐもこへくらがへしてははたらきのねへ
やぐだ 政「おらアもふね松やぶかうじとしやう 下手まへのとこへいつてみれば花代月の 政「こいつはまんざらでもねへ 月、い
いへぬしはあてもふされやせん 政「そんなにむごくしなさんな 雪「ぬしをあてまうすときつとわらひなんす 政「こい
つはあやしおこたつだあらし音八ときこへやうどれん、 下いやがるをむりに 若「アツ、く、く、 花「それみなんしやけど
をしなんす 政「ヲヤ此炬燵にやアくわんが付てる 下蒲團をとつてみれば用たす深い引だしを 政「こいつアい、思付だ 花「もふ
おしまひなんし火の用心がわるふおす 下兵衛がとこへ行 花「モシへねなんしたかへ 源「どふしてねられるものかまつ身
なりやこそ疊ざんさ 花「どふしたのでおつしやうね 下たばこをつけ出しくびにかけたまもりをとつてたすのくわんに 若「モシへそつち
らへねておくんなんしなねがつてが悪ふおす 下まわくをあかるいほうへ 若「つめたいよぎだよさむうおすねへ 源「コレおめ
へさつきよしはらものならさしがあるといつたそふだが町のうちでだがなじんでくるへ 花「何さだれもなじみもおつ

58
15

せんが政さんときなんしたからおまへも町のうちかと思つてさ 源「なじみがねへもきついうそだそうはとらの門のこ
 んびらだなじみがなくつてさしをつくものか 花「そふいふわけじゃアねへが町のうちのものは一度か二度きては又ほ
 かへいつたり何かして生わるのくせに口がわるいからわつちらア町のうちのものと見いとマアきめてからあがりい
 すのさ源「江戸の者なら一どか二どでこねへでもいゝかへ 花「何いゝもんでおすかわけてぬしなぞのやうな人は三ども
 四たびも百ねんもよびてへのさ トモはやすこしもちまへの手をだしかけてかきのめす所へこじよくかた手 小じよく「モシイあけてもよう
 おざりいすかへしげざとさんのおつせへすおめしをおあんなんすならこれでおあんなんしとさ 花「なんだ此子アおら
 アもうたべたよもつてゆきや 小じよく「それでもせつかくおよこしなんしたものを置いていきんすよ トい、すて、源「ナン
 ダにばなな一ツはあいかう トやくわんのふたを とればゆどうふ こいつはおもしれへ源公はいかなるたびもして見たがやくわんのゆどうふ
 これがはじめてだ此ぢうよその女郎衆があんころ餅をかいにやつて土なべえ入れてどうするかと思つたら水をいれて
 かきまわすとおきにしろになつたそれよりアこれはいゝ案じだ 花「しげざとさんもゑんりよのねへはつの座敷へこ
 んな事をしてよこして 源「なんのゑんりよがいるものかこいつは一ツいきてへのうはしがねへ 花「そんならこれでお
 あんなんし トかんざしを ぬひてやる 源「ヲ、アツ、こいつはうめへへ トすこしくび 何かでへぶ薬りくさいゆどうふだ 花「くす
 りくさいへヲヤまちなんし トやくわんをよく 見てわらひ出す 源「なぜわらふ トをかたげ 花「しげざとさんもばからしいこりやアしんぞう衆が
 山歸來をせんじるやくわんだものを 源「ヤレなさけねへそんならゆどうふはゆどうふだが薬湯のとうふだの 花「ヲホ
 ホ 政がねてゐるまわしぎしきのびやうぶのそとへ女郎一人来りあんどをかけたて、文を書何かふるしき包といつしよにおいでどこへか
 ゆく政めをさまはしい出でふるしき包をあけて見れば重にくみしふたぢやわんうへににまめ中はとうからしのうまに下はなづけにしや
 うゆをかけたやつ政はじやうだんものゆへあいかたのしんぞうたわいなきをさいわいにかのふた茶碗のものをあも入く
 ひ又床のうちへはいりねたふりをしているさきほどの女郎また来りみればだいなしにくひちらしてあるゆへびつくりして
 女郎「ヲヤ、どうしやうのうねこかのうはらがたつよモウばからしい トびやうぶの モシ雪のさん 雪の「めをさ 津山
 さんかへなんておすへ 女郎「だれぞこへ今きやアしんせんかへ トいふ政は今め 政「ウ、もちつとさつきだれだか女郎

衆が二三人のことをわらつて何かしてそう トくしくして 女郎「にくらしいねへおふかたそんならげび川
 さんたちでおつしやうわつちやぬしたちにそふされるおぼへはねへモシきいておくんなんしわつちがあねさんが京や
 にお出なんすが此ごろびやうきていんすから見まいにやりんしやうと思つて一日かゝつてにたのでおつすわつちや又
 めしたちにこんな事をされちやアたちんせんからやり手しゆにいつけてつかはしんす 政「そりやアじやだんでもわ
 りいしやれだしたがだれだかきつとした事はしれぬへ 女郎「何さてへげへしれておりんす 政「なんでもわりいじやう
 だんだ トしらをきる此女郎あねの所へやるとはいつはり地いろの所 女郎「どふもしかたがねへ雪のさんおめへと此客人とわつちとた
 べてしまいんしやう是ばかりになつちややらせ雪のさん下へいつて酒を盗んできなんし 久兵衛が床の中に月の戸かぬ
 へやるのゆへこうされてもじつはやり手にもいはれぬなり
 月「なんとかきんすへ 玉「清兵衛さんとさ 月「モシぬしへ清兵へとはやつぱり清兵へとかきんすかへ 久「清兵へはあ
 りがたへりやくして書とそやうに見へる女郎しゆはおつな事を云もんだ 玉「しれさアかなで書ておくんなんしなサ
 ア早くサ 花「ぬしへ見なんすなわつちやはづかしい 久「小なみが山しなへゆくよふな事をいふの 玉「うちへよこすと
 わりいといゝなんしたがどこへ出すととゞきんすね 月「やつぱりかみいどこへたのみなんしな 玉「やつこのけつかへ
 月「此あいだのまつさんの所へさ 玉「あそこへきなんしやうそふしんしやうお有難うおすもしへお休みなんし ト出て
 月「アレおきなんしきざでおすまへ子をよんできいした 久「何あれは米のあげ下だ ト三人の床のうちいろノ模様あれ
 岸もかわる事なければこゝらはりやくすかくてだんトよもふけしんノと二かいしめりて猫がぬすみひするころ
 となり右も左もごうトのいびきまたはぼつちノのむつごとおくの方の座敷で三味せんを水でうしにあわせいる
 歌「夜中はうらみ 曉のわかれの鳥とみな人にくまれぐちなあれなくわいなせとむきな耳にてもかねは上野か
 浅草か

艶語 志羅川夜船大尾

58
19

命子部屋叙

京傳に水破の革の息子部屋あり。是を胴亂にせんとすれば。放蕩の唱にかよひ。これを巾着にせんとすれば。彼欠債に音あひ近し。其欠債に勞せんより。寧放蕩に遊ばむにはと。すましくしき心のすさびに。古し雨夜の品定を摸し。かみの品しものきざみ。有趣人の規矩につきで。とあれはかゝりあふさきるさに。あしといひよしとさだめ。よし原女郎衆のはりをゑらみ。遊子のあなを穿ぬれば。とみに一箇の囊入となれり。予囊中を探て作者のもと代を窺に。意味は仙袂の巾着よりもかるく。論は珊瑚樹の巾着よりも敬し。所謂女郎買の虎の巻と。傾城の智惠囊と也。底を叩て口訣を説。疊を打て口舌を辯ず。通計都て十二篇。壹兩二部を一巻とし。以て新吹の楠廷尉が櫻井の巻に比して。海内の命子に授。郭中の花婿に與よと進む。書肆何がしも禮を奪へるがごとく。遂にひつたくれんげの革細工をなす。いんてんや此世にうまれたる。土農工商。入込の遊治郎。是を佩て廢ざる事。助六が印籠のごとく然らば。期月にして通と成。女郎の涙を緒メとし四角な玉子を根つけとせん。豈黠を洒落本の胡麻胴亂。此息子部屋に遶んやと。貴賤上下おしなめてみなかんせん縫のいとくちをしる壽。

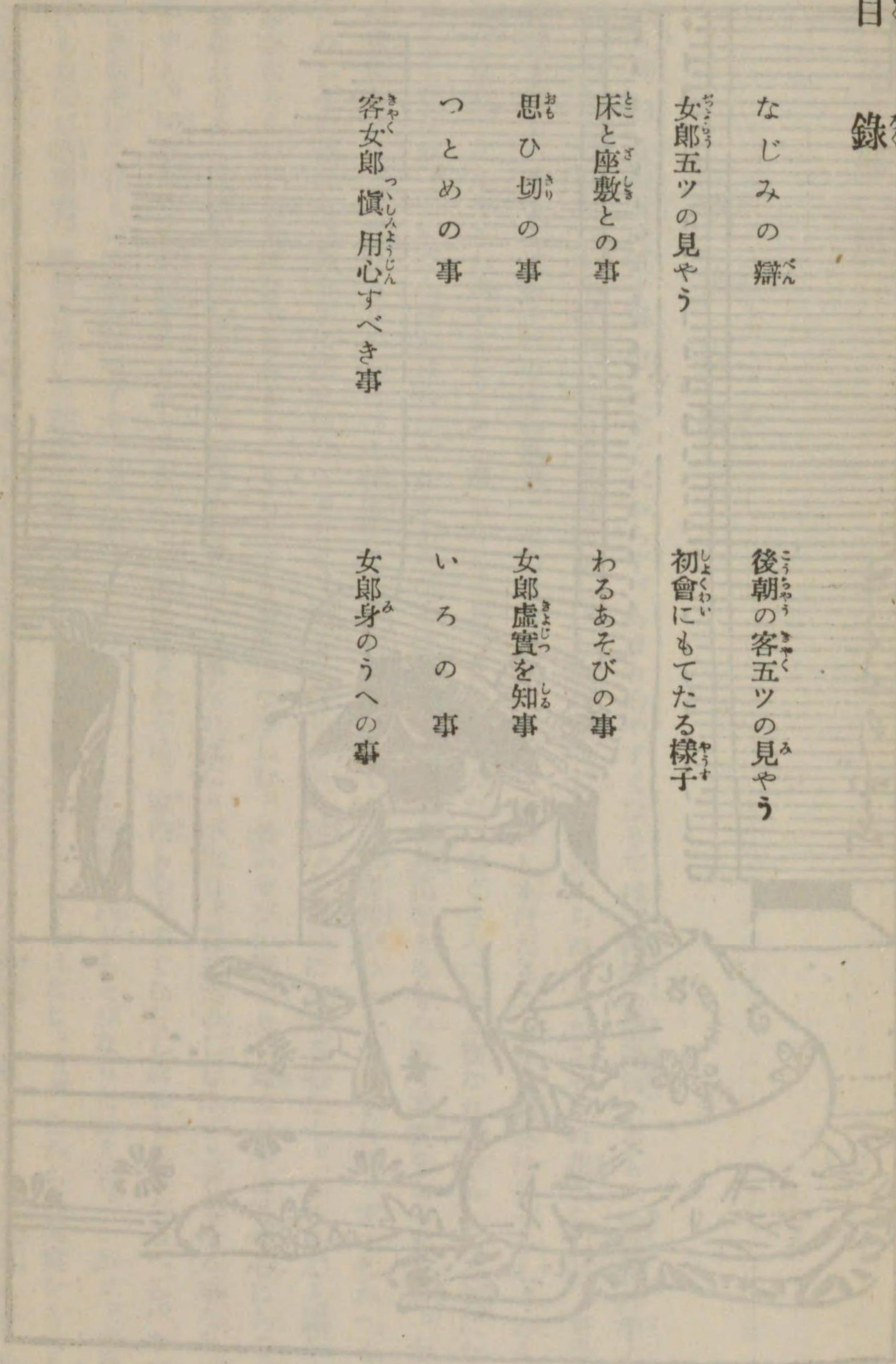
戀川すさ町

58
15

58
15

目録

なじみの辯	後朝の客五ツの見やう
女郎五ツの見やう	初會にもてたる様子
床と座敷との事	わるあそびの事
思ひ切の事	女郎虚實を知事
つとめの事	いろの事
客女郎慎用すべき事	女郎身のうへの事



自序

革の極品なるを。ムスコビヤといひ。女郎の革羽織なるを。ミジマイベヤと云。粧部屋の仇口に客の名たてば。息子隔室の無多口に。女郎の魂膽をはなす。印傳ならぬ京傳が。面の皮を製したる。虚言の皮を。又名號て。無粹語歴夜といへども。素より遣手が前巾着の。名代をも勤ず。むなしく箱に久しきを。頻に耕書堂の主人が。提物にあたふ。

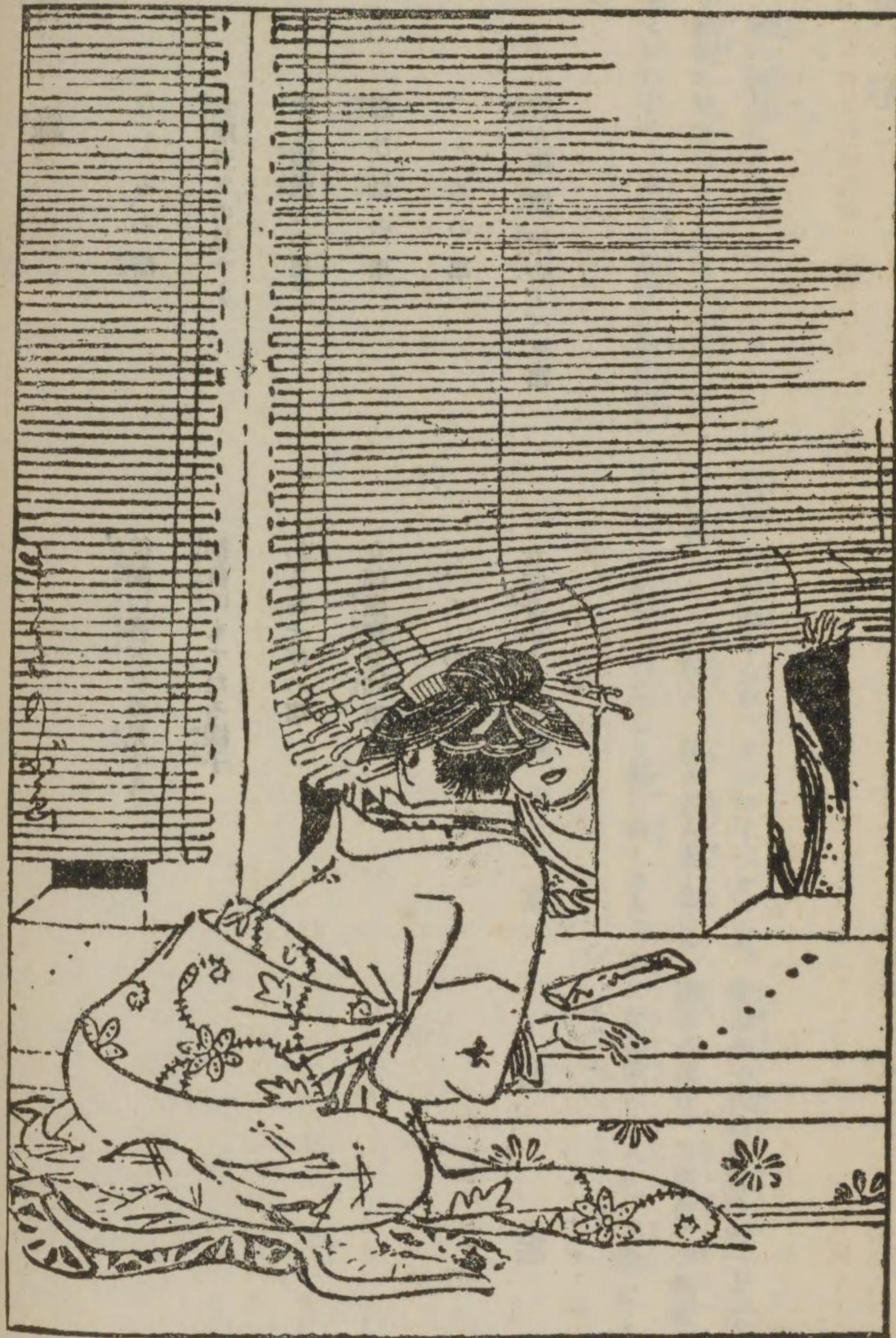
作者 京 傳 述

58
15

令子部屋

馴染の辯

或人問曰女郎買は貳十會位にすぐべからず。あまり心こころやすくなりては。内證ないしょうの相談さうだん何かのめ合諸あひしょわけ手てくだ
 こんた入りくつ心をつかうばかりでなくさみはなし。しかればなじみふかぬうちがあそびの花はなならんか。答曰女
 郎買貳十會くらゐまではあそびのうわ水也。そのうわ水をながしうひしあげたるこんたん諸わけむづかしくからむ
 か遊びなり。なんそうわ水をよしといふ事あらん。又問女郎はぜんたいなくさみにかふ物ものなればおもしろく興きようになる
 こそあそびなれ。こんたん諸わけ心づかひがあそびとは。答曰さればよ其花そのはなをとるものあり其實そのまことをとるもの有。女郎
 の虚實まじりにかまはず。我われひとりのあそびに新造しんぞうをいくらもあげ藝者げしやをよび牽頭けんとう持もちをつれどつとさわひでずつとかへる。
 是たのしみの花なり。かやうに花はなやかならずとも。座ざしきもしづかに遊あそびたがひにかざる心なく。くめんごと諸わけ
 萬事ばんじかたりあい。ともにたのしみともにくらうする實情じつじやうをたのしむ。是あそびの實まことなり。此このふたつは客の心にあるべ
 き事なれども。其實そのまことをたのしむは客の心ばかりでゆかぬ事なればなりがたし。花をたのしむはどこでもなる事なれば
 仕しやすし。同事おなじことならば初會しよくわいやうらより。なじみの所ところにてさわくは。家内かだいも心こころやすくひとしほおもしろかるべし。なじ
 みなきあそびの花といふ事非ならずや。又問床とこをこのむはやばらしく座敷ざしきの内うちがあそびなりと云人有。いかゞ。答曰
 是れもおなじ道理也。座敷は遊びの花床は遊びの實まことなり。いづれあそびならざるはなし。又問しからば其實そのまことをとらん
 か其の花をとらんか。答曰花も實まことともにとるにしかず。たとへば座敷のあそびは風袋也。床のあそびは正味しょうみなり。床



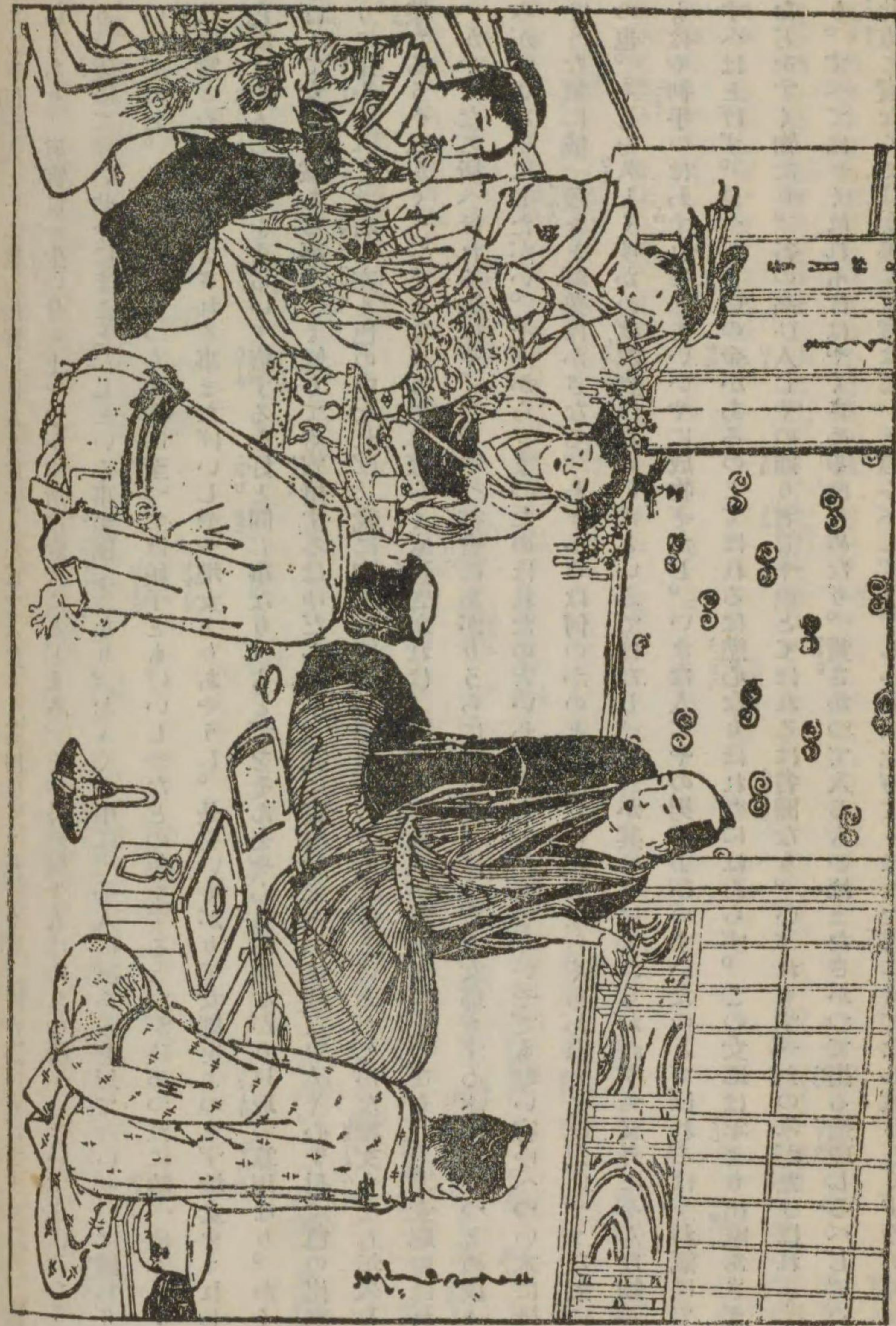
ころが中の丁のそこは御しんにある事などから見てたりどふぞするならあがらうなどとあつかましく仕かけられ。ぜひにおよばずそのぼんは女郎の損となり。平の色に仕かけて口先ではまらせのつ引ならぬ無心をいかけむりにこつちから色事にこぢ付て引たをすなど。情の戀のといふさたにあらず。又茶やの男船宿又は友達なぞにたのみていひこんでもらいむりに色客にこしらへてあがりこすく斗立まはり物いらすにあそび。たま／＼物まへなどにわづかな事でもそうだんしかければさま／＼にからんでにげたがり。ぜひやらねばならぬやうになると色を物どりにするの慾心女郎のとなんくせをつけてそれぎりでおさらば。其うへあの女郎をばとんだやすくかつたなど、拂物でも買たやうに手柄そうに我恥をふれあるく。人情をしらぬといへば人らしけれどもつらの皮あつき獸なり。中にはどふもくめんも出来ず友達中をかりあつめて。紋所の黒つむぎの小袖すりこ木程な袖口繩のやうな縞なこの帯。すこしは綿もちらつくを内の方へ廻し黄色てこそあれ緋縮緬の襦袢。毛はなしとも黒天鷲絨の半糸り。赤くなつても其のむかしは黒ちりめん頭巾。あたらしい物にははゞの廣ひ日和下駄。やう／＼形は出来ても囊中をのづから銭なし。ぜひにをよばず襦袢と頭巾をぬぎ捨てもたらず。友達之母近所の女房などをなげき布子帯などをかり出し。やう／＼こしらへて行などはかなき遊びと云ながら。女郎をはぎさへせねば哀なる方もあれども。かやうの身のうへの者に女郎をたをさぬはまれなり。にくむべし。くわしく云たけれども筆とるもうるさければあらましにてやめぬ。

思ひ切の事

或人問曰四代めの高尾が詞に。此里へきたらぬものこそ粹なるべし来るはみなやほなりといひたるよし。當世の通者といわるゝ人の新造かいてむだにしやれるはよく此詞にかなへり。奥州がてうちんにてれんいつわりなしとひらがなにて書せしも客におもひつかせん偽なるべし。さすればけいせいにもことなきに極りたり。答曰けいせいの一に代に

あふ客何千人といふ數の内實にははるは十人か貳十人なり。其内にもうわ氣も有。男の方からだますもあり。縁のなにもあり。眞實に一生の身の上をまかす所は壹人にとどまる。その外の何千人にぬしの所へいきいすよはみなうそなり。爰にてけいせいにもことなしといふ事至極尤なり。おゝくの中に一人に誠あるを以てけいせいに誠ありといひがたし。しかれ共誠をつくす時に至つては娘子ともげいしやなどの色をするところがひめつたに脇へはふれず。其代に實とおもつてだまされる事またげいしやや地女よりあやうし。是をいやがりて女郎をこのまず地女をうれしがる色師は町人の商をきらいて盗するを好と同じ事なり。もとてをそんをせんとあぶながら只取の算用なり。かく云へばとて女郎に誠ある事をよく知りても安堵するはゆだんなり。我に實有女郎と思はばなを／＼心を付て色の出来ぬやうに用心すべし。右も左も色の中なれば。我に實あれば外へ心はうつさぬものといふたしかな證文もなし年久しく馴染たるうへはかくべつさもなきうちしばらくも遠ざかれは。其内に了簡のかわる事有ものなり。又問女郎のほれるはいかやうなる所へほれる物にや。答曰まづ初會にあがりうらに行三度めにも行。女郎もずるぶんよくつとめ段々なじみがかさなるにしたがい。そばからきまつたのほれたのといわれ。もとがあまりいやでもない客ゆへつい本にほれたやうな氣に成。段々と馴染はかさなる。わかからは何のかのといひ立られしばらくあわぬとよびたいやうな氣に成もの也。そこを久しくゆかねば眞實ほれぬいたといふてはなし。いつか其やうにもおもわぬうち又外にそんな物が出来もはや初手のはわすれてしまいいやに成物ぞかし。いきな人じやの男がよひのすいたのてほれるはうわ氣にて中々すへはとげず。見へがよいの金があるのてほれるは慾心なりほれたにはあらず。この女郎は年より出家あさぎうらなどをすく物なり。名の高ひ人じやの通り者じやのてほれるは名聞なり。いづれもすへたのみがたきほれやうなり。すべてはやくほれるはやくさめるはじめなり。貨さかつて入るものはまたさかつて出る道理しるべし。いづれ此方に實なくては女郎にも實はないと思ふべし。又問しからば此方よりほれた體にもてなし實らしくするが粹なるべ

58
15

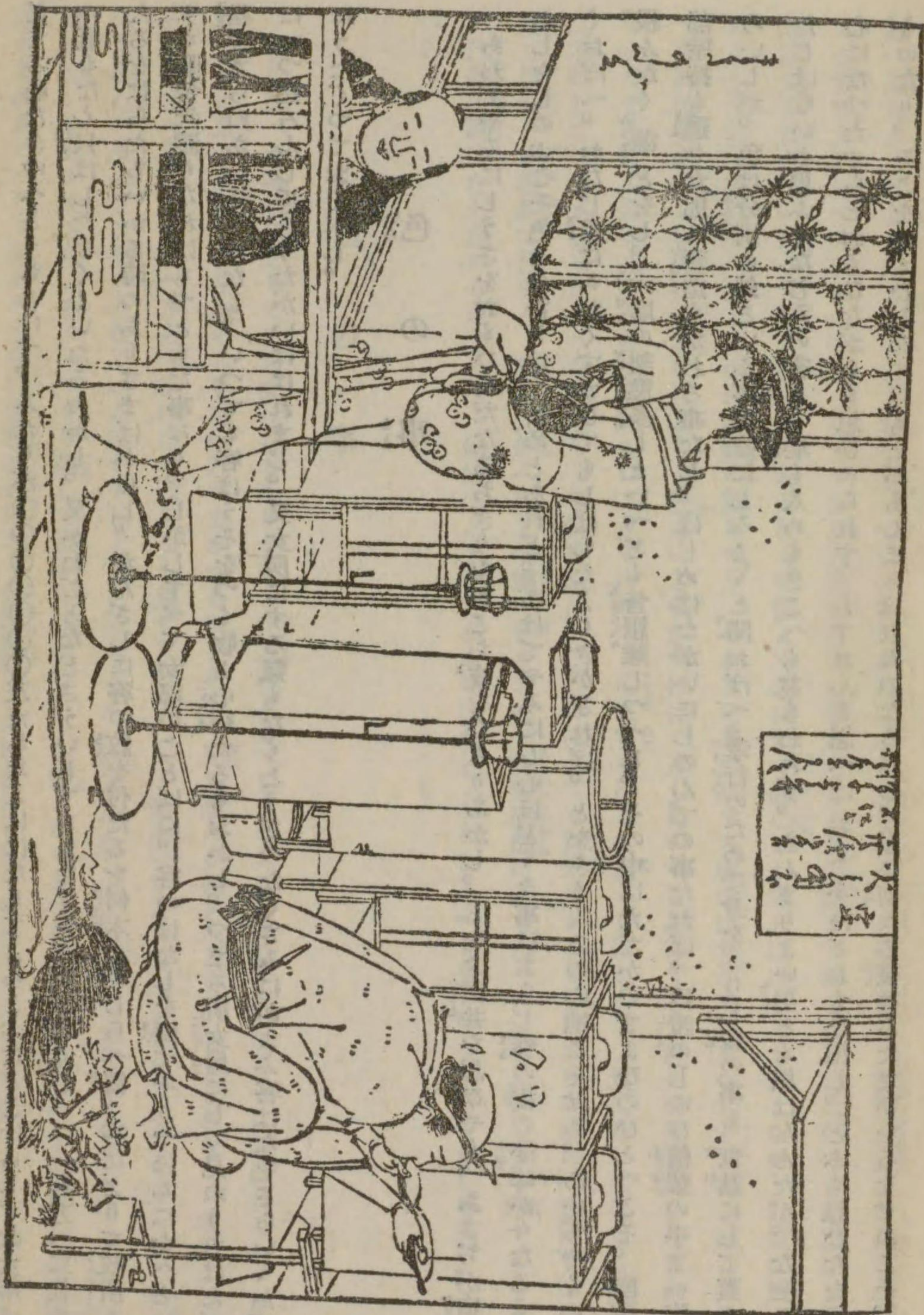


しゃ。答曰粹といふはそふした物にあらず。女郎のかくす事を知りてもしらぬていにすまし。女郎に不實な事あればさつぱりとされ。わけの立た事は何もいわずにをんくわにして此方の實をもつて女郎の實を得る天然自然の徳あるを粹とはいふなり。女郎のあなをいひほれもせぬにほれたふりをし口さきおもしろく女郎をはまらせるをすいといわず。女郎も同じ事にてだますばかりが女郎にもあらず。もとより情を賣物にする身なればうそもいはねばならぬはしれた事ながらうそもうそによるべきなり。すかぬと思ふ客にてもよくあいしらいおもしろくあそぼするか商賣なれば。にくいとおもふてもかわいそふな身ぶりをし。そつちへのけといひたい口からこつちをむきなんしといひ。よこつらをくらわせた手てたき付は尤なうそなり。此虚はうそにてうそにあらざ勤の道をまもるのなり。かくつとめるも何の爲ぞ世渡りの爲なれば物日を仕廻わせ物まへのそうだんねだり言。客の身分により相應々々のことは有うらなれども。あいたる時には辯にまかせてかけのめし。歸つた後ではあいつが人の氣もしらずにこんな事をいふのあんな事をきくとくやしいのとわるくいひ。しかも地色の仕せをする金迄をひつたくる。いかにつとめのならいなればとてあんまりにくいしかた天道ゆるし給わんや。かやうなる不實の心なきものならばたとへ岡場所端々の女郎なりとも高尾薄雲が下に出べからず。いかなる至盛の太夫なりともどうよくな實なし女郎はうその皮はく〇〇の女房となすべきなり。女郎をさへ其不實をにくむ。いわんや客の身としてほれぬ女郎にほれたふりをしてつとめを出させむしんをいゝ口さきて一ぱいくわせしまいはたきばなしにするなど、はあんまり情ないやつなり。しかし客にどろぼうあれば女郎に追剝あり罪は五分々々と云べし。凡客の心得女郎にほれたらば實をつくしほれずはやくやめてほれた所へ行べし。いか程實らしくほれたふりをしたればとてうそはすへにあらわれぬ事なし。ほれた共ほれぬとも我生の通りにしてそれで氣の合女郎にあふべし。我持まへてその合ぬ女郎ならば。やめにして脇へ行に手間もいらす。女郎も我も互に氣が合實があらば勤の身なればとて戀も情も有べし是天の道理莊子が所謂造物者のあたふるなり。女郎

をおそれたくもないあたりに鉢巻をし。翌日の氣あつかいもぬしゆへなればと。苦勞はかへつてたのしみとし。傍輩にもしのびて跡や先に成つたる文をかいて半切の一卷もつかひ。かへすとかいてもたらいでおつて書をかき。それでもたらぬゆへ書添をする。あけて見ればみなをなじ事なり。きのふのうれしさよいらのくたびれ心はもだく、いひたい事はやましく人めはつゝむ氣はてんぐするゆへ。かんじんの事はおとして。やくにもたゝぬ同じ事をいくらかくものなり。是は實なり。又わが座敷へ女郎多くあつまり。てんぐの色客のはなしをするはよし。一通のはなし斗して居るはよいにもあらず。これにはいかふわけあり。又夜見世の出ばなに格子よりそつとのぞき。見世におらばつれに我名をよばせて見べし。其時急に立てさはぎまはるは實なり。少しもいそぐけしきなくふせうぶせうに立てあたりを見るはいかほど座敷や床にてよきとてもにせものなり。つれもなくは自身格子より其女郎の名をよびて見べし。實なればにつこりとし。うれしそふにとる物も取あへず立て内へ入り。ぞうりも片あわせにはいて。客そとにをれば早々かけ出。御無事かいかと問。客をば我座敷へいれ。其身は外の座敷へ行て鏡を出し。白粉をぬるやらふくやら。べにを付るゑもんをなす。氣違ひのやうになり人のいふ事も耳にいらすとんだあいさつなどしていそがしそふに座敷へ來り。たばこ入も鼻紙もわすれ今思ひ出したやうに禿をよび見せより取よせ。すわりはすわつたがなぜか人が居てははなしがないやうにして居る。皆實なり。心をとめてあいとぐべし。さりながら女郎の氣により是程にしても又外へうつるやうなうわ氣もあり。あてにならぬは此里ぞかし。心こゝにあらざればくらきにまよふ戀の闇これ闇ならしやうことがない。

つとめの事

ふかくなじみたる女郎にふぐ汗葱あさつきなどすゝむれば。女郎も心よくくふを客うれしそふにうち笑ひ。我にへ



だてる心なきゆへとうちとけて。ふたりが〇〇〇〇友たちなどにはなしてよろこぶなどこけらし。此女郎は何の氣もなく只はしたなくくいたるおかし。又かねごとなどさういしてさもなき方へ實をつくし。つい其方へ二世かけたるをはらちいかる時のありさまばかりし。かんざしに客の紋を付たるを何本もこしらへ置。客によりて紋所ちがうも是皆世渡りなればもつともな事なり。しかしすべて女郎のことに。客のはなしを聞てそりやほんにかへといふ程つまらぬあいさつはなし。いつでも客はうそをつく物と心得たるもおかし。つまる所女房にして見ぬうちにはたがいいつ迄ろんじてもうたがいははれまじ。又女房にする氣もなくとうざのなぐさみにかよふ客はなをさらい、かげんにうたぐつておくべし。

色の事

あわてやみにしうさをおもひあだなるちぎりをかち夜をひとりあかし。とをき雲井を思ひやり。あさぢが宿にむかしをしのおこそ色このむとはいわめとあれど。あはてやみにし心ほどき事はあらし春の夜の夢ばかりなるもながくおぼへ。おなじりにちかくすまひてもしよしたよりきかざれば。とをきくも心の心地こそせめ。あいぢやくの道具根ふかく源とをし。六塵の樂慾多しといへども皆厭離しつべし。その中にただかのまよひのひとつこそ。座敷持も部屋持も廻り女郎も新造もかわる事なし。はじめはたがいにしのんでの事なれば。内證のしゆび傍輩の手まへ迄つくろいしが。色は分別の外といふ事が身にしみくと聞おほへ。孝行のために身をうりし親の事も。世話にして貰ふてかたじけないと思ふたなじみの客も。恥も人めもきこへもおもわれず。あんまりよい男とも思はなんだが。なぜこんな心になつたやらとおもひながら思ひきられず。わすれんと思へばおもふほどおもひ出し。どふも思ひなをされぬものなり。そこをおもひなをすはもとがあんまりほれぬなるべし。思ひ切たる後はふたたびいろをせぬこそ誠に女

郎一疋なり。はじめはふかくおもひても。ついとをざかれれば。さるものは日々にくとく。昔の貞女は今のたわけと思ふが當世女郎の十人並の心なり。心やすひからおこりつい手がざわり足が障り。はじめきたないやうに思ひし顔も見れば見るほどすいたやうで。其の男のわるひくせ迄よく思はれ。無心いわれるればけつくうれしいやうな氣に成り。くめんしてはだかになるをしらぬは傾城の氣しやう。それをそまつにする客はばちがあたるべし。又客をわるひと思ひて見れば見るほどいやに成物なれども。色といふ名がつけば。はじめいやと思ふても。色といふ名にひかされて。ついでいまでもなくなるものなり。女郎の口さきてほれて。心で舌を出して居るをばしらず。實になつてかよふ客を。すこしはむごいとおもひそうな物なり。それを思はぬ女郎はとも行末よかるまじ。さりながら兩親は下に居る二階で出合。屋根船で色をし。親をば舁へ出して籠の番をさせ。飯焚同然におもひ。しかり廻して不孝するとも思はぬ床藝者踊子などからくらぶれば。傾城ほどまこと有ものはあらじとおもへとも。色をも香をもしる人ぞしるなるべし。

慎の事

客の慎べき事名代とりてはら立はむりなり女郎の仕方によるべし。もらひかけたる女郎をやらぬはわるし。きれて又つれか茶や船宿などをたのみ手をいれて立かへるまじき事。同じ家の女郎と色ぐるいせまじきなり。我氣にぬけめがなくとも顔へいだすべからずかほはやぼらしく見せておくべし。我あいかたの女郎とちわするはやぼらし。新造やりて廻方禿などを詞きたなくいふはやすし。ゑもんをつくり帯をなをしあせ手拭などををりにまくはいやみなり。せいたいをぬりをしろいをつけつくり髷して物いふはばかしくし髪さかやきはせずとも身にあかを付べからず鬚爪のびたるはきたなし。身のうへ身代諸藝衣類男ぶり自慢顔なるはむねわるし。ぢんぢやうふるは初心らし。心にもなき

58
15

すへのやくそくすべからず。外の座敷のうた上り三味線などそしるべからず。よくねたる女郎をおこすべからず。初會にふられてはら立べからず。女郎のたんすの中などあけて見まじきなり。名代の女郎に手を出す事なかれ。横に來たる女郎久しくとめておくは心なし。客をせくは心せまし。金銀の約束まちはぬやうにすべし。はじめより我身のうへをあかす事當世の女郎買多くする事なりよろしからず。女郎のおさな名はやくとふべからず。長居つゞけすべからず。女郎の憤べき事第一地色すべからず。げいしやたいこもち茶屋の男などとあまり心やすくすへからずうたがいうけるたねなり。色になづみ客をそまつにすべからず。色にかまけ氣のもめるにまかせ髪かたちとりみだす事たしなむべし。腹の立時すかぬ客料もなひ新造禿などにあたるべからずはしたなし。禿の行儀詞いやしからぬやうに仕付べし我新造の人から禿の行義にて姉女郎の身もちまてしるゝ物あり。髪を切起請をかき爪ははなすともゆびを切り物はせまじき事一生の疵なりほり物はたとへやきけしたりともあとほきへがたし。わかひものゑこひいきすべからず。むり酒ひや酒きまゝ酒第一身の毒なり。茶碗さけのむ事客の氣によりてあいそうのつきる事もあるべし。はづかしからずともはづかしきていをするは女の情なり。大口などきくはさがなし。すそ高くまくりてあるくべからず。客のまへにて耳こすりすべからず。女郎の氣によりてなじみもなき客の見る所にて外の客へやる文をかく事ありよからぬ事なり。客の紙入ことわりなしにあける事慎べし。

女郎の用心すべき事。初會よりふかくほれたやうな事をいふ客。はじめより我身の上あしきといふ客。初會にくらうそうな顔色又は至極色あしき客。女郎をはやく寢入らせたがる客。口先の至極おもしろき客女郎のお所帯のあしきかよきかをしりたがる客。

客の用心すべき事。口へ出してほれたやうな事をいふ女郎。宵から女郎のそわ／＼する夜。度々座敷をあける女郎。内のこしもとあるひは茶やの女若ひものなどと耳こすりする女郎。裏茶屋と心やすひ女郎。男げいしやをよばせたがる女郎。小用に行ておそく來る女郎。はものを手ちかくへ置女郎。

女郎の身のうへ

花は櫻木人は武士なげけいせいにきらわるゝ其行義ただしきをこのまぬ情を云たる付合の句なり。女郎の身うへほどあわれにおかしき物はあらじ。朝夕のめしに物のいらぬばかり。その外は世帯もちにかわらず。それさへあふらげなすびづけそば切なんど座敷持部屋持も襖障子のはりかへ疊かへ部屋座敷の代の算用造いづれか身のおぶらならざるはなし。もとより手道具調度はいふに及ばず。あぶらもとゆひべにおしろいくしかうがいもさすがいがいはにげなし。折々時々の小袖も同じものきては中の町いぶせく夜見世もつらきものから。禿つかへば子もちのごとくはながみたばこはいもと女郎のまで重荷にこづけとやいわん。まわり女郎や新造にいかい事部屋ばいりさるゝも來るなどはいわれず。心よくよべばりくつのきつうちがう事なり。帯や上着をかりらるゝもならぬとさすがいひにくし。大事にてもきればよいにと小言いふさへ小聲なり。ちやうちんながへのはりかへこま下駄上草履までよくはやくわるくなるもうるさし。茶すみらうそくのかんりやくのならぬもせひなきならい。茶屋のつけ金船宿わかい者やりてお針かふるかみゆひまで折にふれての心づけ。衣の奉加はまだしも上り太夫の會のすり物もすらくにもらうはうしとおもひきや。親方の祝ひ事あるひは法事のそなへ物もまさかすてゝもおかれず。女衞がゆすりはしめ木にかけらるゝおもひこそせめ。ことに親里のかなしきたよりきけばひとしほつらさもまさり。むかふの人とよぶこどり禿がつかひのやりくりもあわたし。やう／＼客がひとりついたと思へばうるたへたらはがれそうなどゆだんせぬもくるしきぞかし。わけて紋日のうきかづゆどふふの胸にこたへる晦日々々のかづかさなりて。大つもごりのちやうちんはむねをこがすほどのほとや見ん。たのみし客のくめんさへまちがいの文見ては流に揖をたへたるおもひなるべし。いかにぞ胸つぶるゝ

58
15

身のうへかなと未練みれんがおこるとはまるが一時人間萬事いちじまにんげんはんじ中用ちゆうようにしかず。

令子部屋終

昭和三年十一月廿六日印
昭和三年十一月廿九日發行

特製
第七回配本
追加募集
第三回配本

【非賣品】

帝國文庫
(第四篇)
京傳傑作集

編輯者兼
發行者
印刷者

右代表者
取締役社長

株式會社 博文館
大橋勇吉
君島潔
東京市日本橋區本石町三丁目十六番地
東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行所

株式會社 博文館

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地
振替口座東京二四〇番

製版所 印刷所 製紙所 製本所
共同印刷株式會社
共同印刷株式會社
王子製紙株式會社
江場製本所
看取製函所

58
15

2633

~~58~~
15

<p>明治三十一年一月廿六日 明治三十一年一月廿六日 明治三十一年一月廿六日</p>	<table border="1"> <tr><td>第一編</td><td>第二編</td><td>第三編</td><td>第四編</td></tr> <tr><td>...</td><td>...</td><td>...</td><td>...</td></tr> </table>	第一編	第二編	第三編	第四編	<p>帝國文學 (第四編) 東京講義</p> <p>東京市立中央圖書館 東京市立中央圖書館 東京市立中央圖書館</p> <p>大講義 吉</p>	<p>新文館</p> <p>東京市立中央圖書館 東京市立中央圖書館 東京市立中央圖書館</p>
第一編	第二編	第三編	第四編								
...								

~~583~~ 918
15 TE24
(4)

